

「知性について」－ 2 : §1—§5

Y. A.

H27/09/23

§1

我々の認識と科学の基礎は説明不可能なものである。この基礎が形而上学の本領である。

§2

殆どすべての人間は、自分があれこれの特定の間人であることを、そこから導かれる系を含めて、絶えず気遣っている。大事なことは、そういうことではなくて、自分がそもそも人間であること、そして、そこからいかなる系が出てくるかということに気遣うことである。

前者の心の傾向は物事に接していつも個別的、個体的のもののみを見て、物事に備わる普遍的のものを全く見ないことである。後者の関心事は種とか属とかの普遍的存在（イデア）のみである。この差は極めてありふれた物事についての見方の末端にまで及ぶ。

前者の知性は彼らの意志に奉仕する。他方、後者の知性は彼らの意志に奉仕しない。後者の普遍的事項に向かう精神的傾向は哲学と詩に於いて真価のある仕事を成し遂げるための必須条件である。造形的芸術家でさえも、個体の中の理念を表現せんとする。

知性が意志に奉仕しているかどうかに関するこの差は次なる事実から派生する。個別的な事物のみが経験的実在性を備えているので、意志の本来の対象となるが、他方、概念や類や種はすこぶる間接的にしか意志の対象になりえない。

§3

哲学するための基本的要件の第 1 は心にかかる問いを率直に問出すことで、第 2 は自明の理と思われるすべてのことをあらためて問題としてつかみなおすことである。更に、精神的閑暇のあること（なにかの目的追求のせいで精神が意志に誘惑されていることがないこと、世界が与える教示を素直に受け入れる余裕のあること）が必要である。こういうことを、自分自身の個人的利害得失やそれへの手ずるなどに気を配ることを本意とする哲学教授たちに望むことは無理。

§4

詩人は人生の絵図を人の想像力に描いて見せ、その後は各人がこれらの絵図に触れて考えを運ぶのに委ねる。詩人が愚者にも賢者にも等しく満足を与えるのはこのためである。

これに反して、哲学者は思想をもたらし、そのうえで、彼の読者が彼と同じところまで考えを進めることを要求する。それゆえ、彼の読者層はすこぶる小範囲に限られてくる。

こういうわけで、詩人は花をもたらず人に、哲学者は花の精をもたらず人になぞらえることができる。

詩的作品が哲学上の業績に対してもっている第2の大きな利点は次である。即ち、詩人の作品は妨げあうことなく相並んで共存でき、最も異質な作品でさえ、同一の人によって等しく享受されうるが、他方、哲学者の体系は生れ出るやいなや、あたかも即位式当日のスルタンのように、はやくも、自分の兄弟たちの没落を狙っている。というのは、蜂の巣のなかに一匹の女王蜂しかありえないように、日程にあがる哲学は1つのみである。つまり、体系というのは、蜘蛛の巣のように非社会的なものである。こうして、詩人たちの作品は子羊たちのように柔和に相並んで生を楽しんでいるのに、哲学上の作品は、他作品を破壊せんとする生まれつきの猛獣である。この戦闘はすでに2千年以上も打ち続けている。日程にあがる哲学は1つのみであるから、哲学者として勢力を得ることは、詩人として勢力を得ることよりも無限に困難なことである。というのは、この戦闘に勝つにはまず世に理解されねばならないがこれは簡単なことではない。詩人の作品が読者に求めることは多くの興味深い作品たちの中に侵入した高々1, 2時間の関心を引くことに過ぎないのに、反して、哲学者の著作は、読者の考え方を根底から覆そうとし、読者がこれまで学び信じてきた一切のものを自ら誤謬とすること要求し、それに読者が費やしてきた時間と労力とを無駄と断じ、そして読者に初めから出直すことを要求にする。

ときには、哲学者の著作は国家すら相手にしなければならない。国家は自分自身の哲学体系を持ち、その保護者となり、他の体系の台頭を防圧する。

哲学の読者層の範囲は文学の読者層の範囲に比べて極めて小さい。こういうことを考え合わせると、およそ哲学者というものがいかなる星のもとにあるかということを知ることができる。——
——とはいえ、つぎのようなこともある。長くにわたってあらゆる国

民から、国籍の別なく選り抜かれた精華たる思想家たちからの賞讃こそ、哲学者に与えられた報酬である。大衆はやがて彼の名を権威まかせに尊敬するようになっていく。幾千年以来の歴史に於いて、哲学者の名は列王の名の百分の1ほどのわずかを数えるにすぎない。してみれば、その中で我が名のために不朽の位置を勝ち得るといふことはやはり偉大なことなのである。

§5

哲学上の著作者は案内人であり、読者は旅行者である。ともに目的地に着くつもりならば、次のような出発時の心構えが必要である。即ち、著者は双方が確実に共有している立場に立って読者を迎えねばならない。しかるに、この立場とはとは、我々万人に共通の経験的意識の立場以外のものではあり得ない。だから、著者はここで読者の手をしっかりと握って、これから彼と共に山の小径を一步、一步、雲また雲を超えてどこまでも高く登ってゆくことができるかを見極めるが良い。かつてカントもまたこういう行き方をした。彼は自己自身についても、他の物事についても、まったく身近な意識から出発する。これに反して、超自然的過程などについてのいわゆる知的直観とか、超感性的なものを聞き取る理性とか、自己自身を思惟する絶対的理性とか、を出発点とするのは何たる不条理であろう。これらはすべて、直接には伝達しえない認識の立場から出発することを意味する。こういうことでは、そもそもの出発に於いて、読者は自分が著者の傍にたっているのか、それとも彼から千里離れているのかを、決して弁えることができない。